

## はじめに

伝統音楽・伝統芸能の諸種目の中で、能楽ほど、出版物の多い種目は存在しないと思われる。その理由として、能楽が、歴史・思想・宗教・地理など、広いテーマを抱えた総合的な楽劇であること、さらに、大成以来、武家などの支配的な階層の人々の社交の材料として、ひろく楽しまれてきたこと、おおまかには以上のふたつが考えられるであろう。娯楽の中に、教養を深め、心身を鍛錬する要素が包み込まれているという点が、昭和にいたるまで、そのポピュラリティを支えていたのである。

出版物の多さは、江戸期にまでさかのぼることができる。謡本（つまり謡を実践するための楽譜）が多数出版されつづけたことはよく知られているが、それだけではない。謡の技芸を深く学ぶことを目的とする技術指南書も、数多く筆写された。それらの多くは本来、秘伝、つまり師匠から特定の弟子へと渡される、「他見無用」の「伝書」である。それがいつのまにか、「他見」されて、広まってゆき、やがてその内容が、出版によってひろく公開されていった。代表的なものが世阿弥の伝書をその中に含む『八帖花伝書』であろう。『謡之秘書』（慶安五年）も、「秘書」というタイトルをもちつつも（もつがゆえに）、ひろく行き渡った謡の技術指南書である。

明治時代以降、世阿弥の伝書をはじめ、多くの技術指南書が、能楽雑誌をつうじて、一般的に公開されるようになっていった。その一部分は、国文学者らの厳格な校訂作業をへて、翻刻・活字化され、学術雑誌の記事や、あるいは単行本となって、誰でも閲覧可能なものとなった。

さらに現代、数多くの研究機関が、所蔵している伝書類を、インターネット上で公開するようになってきた。多

くはカラー写真で、拡大も自由にできる。たいていのことは書齋にこもったまま、わかる時代になった。

しかし、学術的な作業の多くは、翻刻と写真公開にとどまる。それを解釈する試みはほとんど存在しない。

本書では、『うたひ鏡』の翻刻に加え、その現代語訳に取り組む。内容の解釈を、将来にゆだねるのではなく、間違いを恐れず、現代の知恵をしぼって、解釈してみようというのである。

ここにあつまったメンバーは、能楽研究者だけではなく、日本の伝統音楽や芸能の専門家でもある。そして各条の翻刻、翻訳、解説は、メンバーが研究会で議論を重ねることによって完成したものである。無知からくる誤解や誤読などまだまだあるはずなので、どうか、ご叱正ご批判いただければ、幸いである。

本書は、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センタープロジェクト研究「音曲技法書（伝書）の総合的研究」（二〇一八―二〇二二年度）「能の音曲伝書の実践的解釈」（二〇二二年度）の成果報告書である。

本書の刊行にあたり、高知県立高知城歴史博物館には、『宇多伊茂の全』の写真撮影および写真掲載のお許しをいただいた。記して感謝申し上げます。本書に使用した写真はすべて『宇多伊茂の全』（高知県立高知城歴史博物館所蔵）による。表紙や扉に掲載した箇所については、以下のとおりである。

表紙・扉・・・『宇多伊茂の全』第二

中扉（裏）・・・『宇多伊茂の全』表紙

上巻扉・・・『宇多伊茂の全』第一

中巻扉・・・『宇多伊茂の全』第十一・第十二

下巻扉・・・『宇多伊茂の全』第二十六・第二十七

裏表紙・・・『宇多伊茂の全』第二十七